

神戸文学館企画展

# 賀川豊彦の文学

—神戸・仲間たち・神の国—

期間

2009年12月17日(木)~2010年3月22日(祝)

入場無料

賀川豊彦  
献身100年



大正2年5月27日 豊彦はハルと結婚

賀川豊彦が「ノーベル平和賞」候補となっていたことはよく知られていましたが、文学賞の候補に1947、48年と続けてノミネットされていたことが判明しました。これは賀川が『文学者』としても海外で高く評価されていたことを示しています。  
今年、献身100年の年にあたって、多彩な記念事業が開催されていますが、ここでは「文学」に焦点を絞って、「死線を越えて」3部作などの小説、「涙の二分」などの詩を中心に、そのころの賀川の活動と、また共に働いた仲間たちもそれらの作品を通じて紹介できればと考えています。

■開館時間・休館日

開館時間:

平日 午前10時~午後6時

土・日・祝日 午前9時~午後5時

休館日:毎週水曜日

(休日の場合は翌日)

年末年始

(12月28日~1月4日)

■主催 神戸文学館、賀川豊彦献身100年記念事業神戸プロジェクト実行委員会

■後援 兵庫県、神戸市

■協力 社会福祉法人イエス団賀川記念館、鳴門市賀川豊彦記念館、財団法人雲柱社賀川豊彦記念松沢資料館、財団法人本所賀川記念館、明治学院大学図書館、神戸市立図書館

展示資料

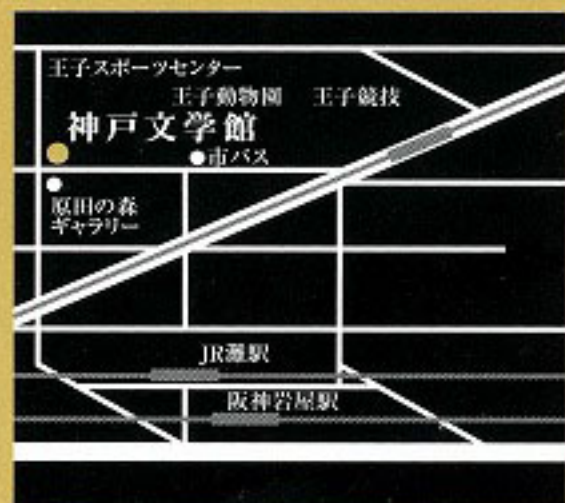
賀川豊彦から中山昌樹(明治学院での同級生、ダンテ研究者、牧師)宛の手紙、武内勝(賀川の働きを神戸で支えた)宛の手紙・絵葉書などを初公開。他に神戸時代の著作の初版など。

記念講演

- 2010年 ● 1月23日(土)「現代世界経済と賀川豊彦」 滝川好夫(神戸大学大学院教授)
- 2月20日(土)「賀川豊彦の文学・神戸時代」 義根益美(神戸文学館学芸員)
- 2月27日(土)「賀川豊彦の贈りもの」 鳥飼慶陽(番町出合いの家牧師)
- 3月13日(土)「賀川豊彦の文学とイエス」 大田正紀(梅花女学院大学教授)

いずれも、時間:午後2時~3時半 参加料:200円 定員:50名  
お問い合わせ・お申込み 078(882)2028 神戸文学館

## 神戸文学館



〒657-0838 神戸市灘区王子町3丁目1-2  
(王子動物園西隣) TEL078-882-2028  
Mail:kobebungakukan@river.ocn.ne.jp



神戸文学館 ● 企画展

# 賀川豊彦

賀川豊彦  
献身100年

— 神戸・仲間たち・神の国 —

## 略歴

1888年(明治21年)7月、神戸に生まれる。5歳のとき両親とあいついで死別、徳島に転居。13歳のとき肺結核を発病、重篤状態になったが「死線を越えて」再生。徳島中学校時代に宣教師C・A・ローガンや宣教師H・W・マヤス博士と出会い、受洗。1905(明治38)年、明治学院高等部神学予科に入学、1909年(明治42年)21歳の冬、神戸に移り住み、キリスト教伝道、隣保事業を開始した。25歳で芝ハルと結婚。事業を中断して、プリンストン神学校に入学、神学学士号の学位を受け、帰国。再び神戸においてキリスト教伝道と社会事業

をはじめめる。労働組合運動、農民運動、協同組合運動、無産政党樹立運動に献身し、関東大震災直後、東京に移り罹災者救済やセツルメント事業に力を尽くす。彼の事業や運動は全国的な規模で展開。また世界の各地でキリスト教伝道を行い、戦後は世界連邦運動を提唱、指導した。

キリスト教社会主義の立場から宗教、哲学、経済、社会、文明批評、随筆、小説等350以上もの著作を発表した。代表作『死線を越えて』『一粒の麦』『空中征服』など。

1960年(昭和35年)4月23日東京上北沢の自宅にて召天、71歳。

1906(明治39)年、徳富蘆花の「目を開け(自覚せよ)、疑いを起せ(考えよ)、責任を帯びよ(為せ)」の講義の聴集の中に、明治学院生賀川豊彦の姿があった。

その後、住いが近いこともあり、蘆花と賀川は交流を重ねている。賀川は、実に多岐にわたる社会活動を展開し、先駆者としての働きを「為」した。そして、農業、社会、経済、宇宙の問題を「考え」多くの著作を遺した知識人でもあった。

しかし、これらの社会的活動の底を流れ一貫して主張したのは、民衆に、さらに世界の人々に「自覚せよ」と、キリストの福音を説いたことで、外国では、社会活動家としてより伝道者賀川のイメージが強い。

キリスト教伝道から生涯離れず、神から遣わされた使者だったのではあるまいか。

賀川は、福音のため「目を開き、疑いを起し、責任を帯び」た、20世紀を代表する日本人であり、世界人であったと思う。

賀川豊彦献身100年記念事業実行委員会(東京プロジェクト)委員長

神奈川県立保健福祉大学名誉学長

阿部志郎

賀川豊彦が生きた時代は、日本が他の先進国に遅れて近代社会を形成しようとした時代であった。賀川の生涯を貫くこの時代は、人間としての課題をことごとく彼に負わせたように思える。幼少のとき、少年のとき、青年のとき、決意を新たに社会の底辺に飛び込み、苦しむ人々の中にあつて人間の尊厳に畏敬の念を覚え、よりよいものへと作り替えたいとの思いは、彼の一生を貫いていた。その「時代」を、賀川はときに小説の、ときに詩や散文の形をとって表した。

彼が書いた文章は経済(労働、組合運動等)40冊、宗教関係62冊、文学(小説、詩、子どもへの物語)58冊ともいわれるが、そのうち23冊は自ら英訳し、海外へ広まった。150冊以上にのぼる著作には、論文のような社会活動の論理的裏付けをなすものと、詩や小説の中でイエスの贖罪愛が自らにかかることの責任の中からほとばしる愛と悲しみの思索が形を変えていくつかの文芸ジャンルに現れている。

彼に請われて詩集「涙の二等分」の序を書いた与謝野晶子は「我国の諸種の改造運動が軽躁と粗暴とから免れようとするには、賀川さんのやうな指導者と実行者とを一人でも多く得ることが必要であると思ひます。」と表現している。賀川の文芸作品が1947、48年の二度、ノーベル文学賞候補になったことを、スエーデン・アカデミーが公開した。それは彼らが賀川作品を通して魂の叫びを認めたからではないだろうか。

賀川豊彦献身100年記念事業実行委員会(神戸プロジェクト)委員長

神戸YMCA顧問

今井鎮雄